

---

# **緋弾のアリア～呪われた眼を持つ者～**

クロス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋弾のアリア～呪われた眼を持つ者～

### 【NZコード】

N1976Z

### 【作者名】

クロス

### 【あらすじ】

呪われた眼 複写眼をもつ主人公、海山玄武はキンジと共に武偵、神崎・H・アリアに出会いてしまい、色々と面倒ごとに突っ込むようになってしまった。  
週に3話あげれたらいいほうです。

## 今日の天気は晴れ時々少女（前書き）

初投稿のクロスです。初めて何でめちゃくちゃだと思いますが氣長  
い眼で見てくださいm(—\_)m

### 主人公紹介

名前：海山玄武 - カイザンゲンブ -

学科：探偵科 Sランク

武器：トカレフTT - 33 3丁どれも改造銃  
刀 3本（月光、朱雀、カケロウ陽炎）

太刀 1本 霧幻ムゲン

ナイフ 2本

ワイヤーつき投げナイフ 10本

身長：172? 体重：55?

アルファ・ステイグマ

能力：複写眼……この眼の保持者は超能力の発動を一度見ると能  
力の構造を読み取り、自分のものに

できる。（相手の発動して的能力を消すこともできる）

- ・限られた時間でしか使えない（現在は5分）
- ・時間ギリギリまで使うと、次の日全身が筋肉痛  
で動けなくなる

- ・精神的に重いダメージを負つと眼が暴走し、回まわりを破壊しあげます

呪われていると言われる理由

黒髪にカカシ先生みたいなのは普段は黒い眼  
容姿

## 今日の天気は晴れ時々少女

第一弾 今日の天気は晴れ時々少女

空から女の糸が降つてくると思つか?

多分、嬉しいなあとか言つやつがいるかもしけんが実際に全く嬉しい。

少なくともそれを体験した遠山キンジと俺こと海山玄武はさうは思わないだろう。それをきっかけに人生は激変したのだから・・・

ピン、ローン

慎ましいドアチャイムの音で俺たちは目が覚める。

どうやらキンジはベッドでトランクス一丁寝ていて俺はソファード制服で寝ていたらしい

(つーか誰だよ七時なんて朝っぱらから)

「キンジ、まだ寝るから出でくれ」

キンジが服を着てる途中に言った

「寝るなそしてゲンお前が出ろ」「ゲンってのは俺の呼び名だ

「嫌だ!俺のエネルギー源は睡眠時間だ!よつて俺は寝る」

キンジがため息をついて玄関に行つた。なんだ行くんじゃん

「絶対起こさないで放置しといてやる」

「ひびき

そして俺は眠りについた。

俺はそのとき一度寝たことを一生後悔するであろうそのせいであの武偵 神崎・H・アリアに出会ってしまったのだから

約一時間後

「キンジ、何で起してくれないんだよ」

「いや、起こさないって言ってたし一回起こさうとしたよ」

「一回だけじゃなく何度も起こせよ。つーかなぜ」「一度寝してないお前も遅刻しそうになつてんだよ」

「メールチェックしてたらゲンが起きて時間にあわつたんだよ」

ちなみに俺とキンジはチャリで走行中だ。

「そのチャリ一台には爆弾が仕掛けたりやがります」

「キンジ、変なこと言つなよ」

「ゲンおれじやないぞ」

「そりやそうだろ後ろからわいふる」

「だつたら言つなよ」

「チャリを降りやがつたり減速させやがると爆発しやがります」

「キンジ、と、とつあえず連絡を・・・」「助けを求めてはいけません。ケータイをしよう使用した場合も爆発しやがります」ですよね

」

「何のイタズラだつ！」

(正直俺一人だつたら楽に潰せるのに通常モードのキンジが一緒にやあ下手に動けないなあ、せめてキンジがあれになつていたら楽だつたのに・・・)の状況どうじょづか)

あれ、女子寮の屋上になにかいるぞ。つて飛び降りやがつた

「バツ、バカ！来るな！」この自転車には爆弾がー

「クソッ、キンジ一度寝せず今日の天気予報ちやんと見ればよかつた女の子が降つてくるとは思わなかつたよ」

「ゲン、ふやけたことこつてる場合かよ」

「ほらそこのバカ一人！さつさと頭を下げなさいよー

「へつ？」キンジと俺があわせていふと  
バリバリバリバリツ！

俺たちが頭を下げるより早く、問答無用でセグウェイを銃撃した！（射撃うまいなあ、つーかあんなの東京武蔵校にいたか？つて、あれ？）こつちに向かってくるし

「く、来るなつて言つてんだろー！」この自転車には爆薬が仕掛けられている！減速すると爆発するんだ！お、お前も巻き込まれるぞ！」キンジの言つ通りだこつちに来るな「俺とキンジは慌てていった

「——バカつ！——

女の子はそう言つと俺たちのちょうど真ん中あたりの上に陣取つたそして・・・・げしつ！俺たちの脳天を力一杯踏みつけてとんだ。じみに痛い

そして女の子はこつちに向けて鋭くロターンして——ぶらん。

逆さづりでこつちに飛んでくる

「マジかよ・・・・！」キンジと俺は青くなつていた。すると少女は俺たちを抱いてそのまま空へいく少しすると

ドガアアアアアアアアアアンツツツ！――

爆弾が爆破した。あぶねえあと少しで死んでたな。あーあ、あのチヤリ高かつたのに

そのままパラグライダーは体育倉庫に突っ込み俺は途中ではなされ  
壁に頭をぶつけてしまつて俺の意識は少しどんだ。

「痛ツ、武付け所悪かつたか。あれ、キンジはどうだそして」  
・・体育倉庫か「少しキンジを探していると

俺は見てしまつたキンジが女の子と跳び箱の中にいるところを、だ  
から俺は気づかれないようにすぐに隠れいつも携帯している二つの  
デジカメで気づかれずに撮つた。

(これは面白い)写真がとれたぞ。これは使えるぞ主に脅しに

するとキンジがこちらに気づいた

「ゲンいつておぐが俺は何もしてないぞ」

「その娘の服あげといてよく置つよ。まあそれを判断するのはこの  
写真を見た人だけど」

俺がニヤニヤしながら片方のデジカメをキンジに見せてやつた。

「なつ、その写真消せ!」

「で、キンジこの写真いくりで買つへ。」まあ片方なくなつてもまつ  
片方があるから損はないな

「いくらで売つてくれるんだよ」

「今度飯おごつてくれたらいいよ」

「交渉成立でいいぞ。早く消せ」よしこれで一食分食費が減つたな  
そして俺がデータを消すと

「・・・・・へ・・・・・へ・・・・・

「――――?

「変態――――」

「さつ、さわさつ、サイツテー!――」

(お、やつと起きたかケータイで録音しておこう)俺は跳び箱の横  
に行つた

「このチカン!恩知らず!人でなし!」キンジがかなり責められてる

「ち、違う！」、「これは、俺が、やったんじゃ、な！」

キンジがちょうどな！といったときにセグウェイが14台見えた

「うッ、まだいたのね」少女・・・神崎が言った

するとセグウェイが銃撃してきたから俺は防弾跳び箱の後ろに行つた。そして俺の愛銃改造したトカレフTT-33を一つホルスターから抜いてマガジンのチェックをした。チェックしての途中に「あんた達もほら！戦いなさい！仮にも武偵校の生徒でしょ」「むッ、ムリだつて！どうすりゃいいんだよ！」

「俺は準備中だ」

「これじゃあ火力負けするー向こうは14台いるわー！」

ズガガガツ！ガキンッ！

神崎が弾切れを起こしたようだ

「やつたか」あれ、キンジの声が変わってる。

「射程圏外に追い払つただけよ。ヤツら、並木の向こうに隠れただけど……きつとまたくるわ」

「強い子だ。それだけでも上出来だよ」やつぱりなったのかよ

「」褒美に少しだけお姫様にしてあげよつ「ほんとキンジはあとで後悔するべせによく言つよな

（よし、準備が整つた）俺が行こうとすると跳び箱の中から神崎をお姫様だっこして鋭い眼になつたキンジが出てきた

「キンジそのモードになつたんだから目標は一人7台な」神崎をおろしたキンジにそう言いながら俺は能力も使うため呪われた眼

アルファ・スタイル  
複写眼 を解放した。その瞬間俺の眼に朱色の五芒星浮かんだ

「ゲン、右の7台は任せた。俺は左のを叩く

「わかつた」そういうつて跳び箱の後ろから出て行った

今日の天気は晴れ時々少女（後書き）

複写眼は『伝説の勇者の伝説』からいただき、能力も少し足しました。（悪いのを）

ここが変だとこいつといふのがたくさんあると思こまかのであつたら感想で教えてください（――）

3分毎にかかる1分もかからない40秒クッキング（前書き）

主人公のキャラが安定していません十話くらいしたら安定すると思います

## 3分ギリギリか1分もかからない40秒クッキング

### 第2弾 3分ギリギリか1分もかからない40秒クッキング

俺が飛び箱の後ろから出た。セグウェイ7台の方へ走ると「あ、危ない！」とか「アリアが撃たれるよりズつといいさ」とか聞こえたが無視し、愛銃トカレフTT-33（以後トカレフ）で自分に当たりそうな銃弾だけを全弾を使って撃ち落とし、予備のマガジンを持ってきてなかつたからホルスターにトカレフを収めて腰から月光、朱雀、陽炎の三刀を抜き<sup>ダブルエッジアンドエッジ</sup>一刀一刃をする。ここまで動作15秒

そして刀に複写眼<sup>アルファ・ステイグマ</sup>の能力で風を纏わせ刀身延長し、3台のセグウェイを真っ二つに切った。ここまで30秒、そのあと面倒になり投げナイフ4つを4つのセグウェイのU.S.Iの銃口に思いきり投げるそれまでに飛んでくる銃弾は全て燃やし尽くした。

投げた全て投げナイフが残りのU.S.Iの銃口を貫き壊れた。この時ちょうど40秒そのあと複写眼を解除し、三刀も腰に收めて

「キンジ、こっちはやっと終わつたぞつてあれ？」何か神崎と口論してるみたいだぞ

「……悪かったよ。インターんで入つてきた小学生だつたんだな。……しかし凄いよ、アリアちゃんは——」バギュンバギュン！

「あたしは高2だ！」

「そこがあんた助けたんだから強制猥褻の現行犯逮捕するのを手伝いなさい！」俺の方を睨みながら言つてきた。助けてやつたってその後セグウェイ破壊してやつたじゃないか

「面倒だから嫌だ」

「せつ、あんたもグルだつたつてわけね」なぜそつなる！？

「ヤレ」にいなセコ。こいつを逮捕した後に逮捕してあげる

ビツセ今のはキンジに勝てないだろ

すると案の定、神崎をこかしてキンジが「こちらに来た。「逃げるぞ」とキンジに言われ一緒にこの場から逃げていった。

「あんた達逃げるんじやない！あんた達一人ともでつかい風穴あけてやるんだからあ」なぜ俺にまで被害が

これが鬼武偵 神崎・H・アリアと俺たちの出会いだった。思い返せばこの出会いが俺を不幸にしてしまつたんだろう。

始業式後

「はあ、複写眼を使ったあとはとても疲れるなあ」ため息をつきな

がら俺が言つと

「別に疲れるだけだつたらいいだろ。俺はヒステリアモードのせいで精神的にも疲れた。」

「まあ強猥犯のおかげでセグウェイは破壊出来たんだからいいじゃないか」

「だから強猥なんてしてねえ。ゲンも半分破壊しちただろ。あの[写]真ちゃんと消したんだろうな?」

「ああ、このデジカメから消しておいたよ。ちゃんと奢れよ」デジカメを見せてやる。

「ちやんと消せてるな。よかつた」まあもう片方にあるんだけどね  
そして俺たちはクラス分けで分けられた2年A組に入り、少し話していると担任が入ってきてそれぞれ席に戻った。  
俺は担任が転校生がどうとか言つているのを聞き流しつつキンジに何を奢つてもらうかを考えていると

「先生、あたしあの一人の間に座りたい」

何か聞き覚えのある声がしたな前を向くと指でキンジと俺を指す朝に会つた神崎がいた。

「よかつたなキンジ、ゲンお前らにも春が来たようだぞ。一人で転校生を奪い合え。先生！俺転校生と席交わりますよ」おいいいいいい武藤てめー命を枯らす冬を呼び込むなああ

「最近の女子高生は積極的ね、武藤君変わつてあげて」先生も承諾するなああそして拍手なんてしないでくれええええ

「先生！あんなチビの隣なんて嫌です……」俺が神崎を指差して言ひと

「あんたに決定権はない！」り、理不尽だああああ

「キンジ、これさつきのベルト」神崎がキンジにベルトを投げてキンジがキャッチすると

「理子わかった！わかつちやた―――これフラグばっさばきに立つてるよ」理子ナイス教室の皆も盛り上がってきたぞ

「先生、俺、キンジと神崎の愛を邪魔なんてしたくないんで―――

俺がいつてる途中に神崎がガバメントを抜き

ずきゅんずきゅん壁に撃つた。そして教室は静まりかえり

「れ、恋愛なんてくだらない！そんな馬鹿なこと書つやつには――風穴を開けるわよ」神崎が顔を真っ赤にしていった

神様助けてええええええええ心のなかで俺は絶叫した。



## 奴隸制度復活のお知らせ（前書き）

やはりキャラが安定しない

## 奴隸制度復活のお知らせ

### 第3弾 奴隸制度復活のお知らせ

あの後俺は「キンジにとられたな」とか色々言われるのを我慢して屋上に逃げこむと聞き覚えのあるアニメ声がした。俺はとっさに隠れて盗聴させてもらつた。

「ねえ、遠山キンジと海山玄武ってどんな武僧?」

何!/?俺たちのことを探つているのかよ

「遠山君は昔は強襲科のSランクですごかつたよ。で海山君は今は探偵科だけをやつてるけど1年の頃はSSR以外の学科全としてて人間離れしていたよ」

おい、俺は一応人間だぞ人間離れなどこなんてこの眼ぐらいだぞ!ま、この眼は知らないんだろうからこの眼なしで人間離れだと言わてるんだろうな……ひどすぎる

「キンジはやっぱSランクだったのね。ゲンの方はSSR以外と言つところだけが疑問ね」

ヤバい、このままじゃあ複写眼の秘密が知られる!しかもこいつアルファ・スタイルマに向かってくるぞ戻るか

「待ちなさい」

「え、マジかよ氣づいてたのかよ……逃げるか

俺はとっさに走つて逃げていくと

「待ちなさいって言つてるでしょ」

神崎があつてきた。だが俺は止まらずに走つた。しばらくしてまくことができた。

学校が終わりキンジと部屋に戻つて俺はトカレフの整備をしていると、キンジはソファーに座つて考え方をしていた。おそらく今朝の武偵殺しの模倣犯のことだらう

「なあゲンあの爆弾は俺たちを狙つたのかそれとも無差別だったのかどつちだと思つ?」

「さあ、俺にはわからないな。そもそもあれは模倣犯だつたのか本物だつたのかが気になる」

ピンポーン

「武偵殺しはつかまつたんじゃなかつたのか?」「インターホンは無視するのか

ピンポンピンポーン

「捕まつたがあれば本当の武偵殺しじゃなかつたとか?」「俺も無視した

ピポピボピボピボピボピンポーン

「ああうるさいー!」とつとつキンジが諦めた

「誰だよ?」「本当に誰だろ?星伽だつたらこんなに押さないだろーし……」

「おやいー!あたしがチャイムをならしたら5秒以内に出る」と。「……」のアニメ声はまさか…俺がトカレフをおいて見てみると

「「か、神崎!?」」俺とキンジはハモつていった

「一人ともアリアでいいわよ」いやいやそんなんじゃへへへ!野子寮……

「お、おこー!」キンジが止めようとしたがかわされた

「まで！勝手にほいるなー」俺が叫ぶと

「トランクを中に運んだきなさいーねえ、トイレビー？」アリアが  
キンジに向かっていった

キンジが答えるより早くトイレを見つけて入つていった

キンジがトランクを玄関にいれている途中にアリアが出てきて

「あんた達こーーー人部屋なの？」といったあと中まで入つてきやがった

「まあいいわ」何がいいんだよ

そしてひらりと回り俺たちの方を向いていった

「キンジ、ゲン。あんた達、あたしのドレイになりなさいー。  
…………俺とキンジは絶句していた。

あれ？日本つて奴隸制度復活してたっけ？ていうか神様 助けてえ  
えええええええ

## ドレイ＝パーティーの一員でした（前書き）

最近受験生なのに睡眠時間と勉強時間を潰して書いてるからかなりヤバい。この調子だと高専に入れないと……まあ勉強何てするきなかつたからいいけど

## ドレイ＝パーティーの一員でした

第4弾　ドレイ＝パーティーの一員でした

「ほりー…わと飲み物ぐりこ出ししなきょー無礼なヤツねー。いやいや、いきなり来てドレイになりなきこーとか言ったヤツには無礼とかさすがに言われたくないよ。

「コーヒー、エスプレッソ、ルンゴ、ドップピオ！砂糖はカンナ一分以内！」そんなのここにあるわけないだり

キンジがインスタントコーヒーを持っていった。そこで俺はトイレに行つた。そしてトイレから出てきてすぐに

「おなかすいた」とか言いやがった

「何か食べ物はないの？」聞かれたから俺は

「ない」と囁ひこやつた。

「普段ビーフヒンのよ?」「コンビニで買つてるとキンジが言つてじやあ行きましょうとかになつてコンビニに行くことになつた。そしてコンビニから帰つてきてキンジが

「ていうかドレイつてビーフヒンだよ」とか言つた

「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武僧活

動をするの

「嫌だ。なんで強襲科に戻らなきやならないんだ?」俺が言つと

「あなたのその眼の秘密をばらされたくなかったら従いなさい」

おかしいな複<sup>アルファ・スタイル</sup>写眼<sup>・スティグマ</sup>ことは親父が表から消してたはずなんだけどな。裏のやつらは知つてゐがなつてことはブリフそれともどつかの組織の一員だな

「ゲンの眼の秘密?」なんだかキンジは興味を示してゐようだ。

「その眼になつたら、いろんな種類の超能力が使えるのよ。実際その眼になつてから超能力を使つてたし、そして1年の頃はSSR以外の学科全てをとつていた。それはもう超能力はかなりの種類使えりつてことよ」

何か色々違うこともありたけどまあ大体あつてゐな。実際複写眼になつたら色々使えるし。まあのときだけの推測だつたらできる方だな。

「おおよくわかつたな。良くなりました」これ以上調べられてもしばれたら嫌だから適当にじつておいた

「で、キンジは強襲科に戻るのか?」話をえてキンジに聞いてみた  
「何言つてるんだ。俺は強襲科が嫌だつたから一番まともな探偵科に転科したんだぞ。ムリだ」

そういうことはわかつてたよ。キンジが強襲科に戻ることなんても

うありえない。俺ももう強襲科に行きたくない

「あたしには嫌いな言葉が3つあるわ」

「人のはなし聞けよ」

「『無理』『疲れた』『面倒くさい』」の3つは人間の可能性を押し止めるよくない言葉。私の前で一度と使わないで」あ、この3つ全部俺のよく言ひ言葉だ。

「キンジとゲンは私と同じフロントがいいわ

どうせやるならフロントじゃなくてセンターがいいんだけどな

「よくない。なんで俺なんだ」

「太陽はなぜ昇る？月はなぜ輝く？」キンジといかんげんにアリアとの会話が成立しないのを理解しろよ

「キンジは質問ばっかで子供みたい。仮にも武健なら少しはゲンを見習つて考えなさい」

キンジも子供みたいな容姿のアリアには言われたくないだろ。

もう俺はどうでもよくなつたからアリアはキンジに任せトカレフの整備を再開した

「とにかく帰れ。」「そのうちね」「そのうちひつだよ

「キンジとゲンが強襲科であたしのパーティーに入ると言つまで

キンジとアリアが話していた

「もう夜だぞ？」

「何がなんでも入つてもいいわ。私にはもう時間がないの。うんと言わないなら」

もう時間がなーいんだといふと、整備終わったし今から調べてみるか…明日こしよう」と

「言わねーよ。なり、じつあるつもつだ？」

「言わないなら、泊まつてくれから」 もう、本当に神様がいるならこの状況どにかしてくれよ

「絶対ダメだ！帰れ！」

「そうだキンジの言う通りだ。ここは男子寮だぞ。もしばれたら一人が連れ込んだ。とか言われるだらうが！帰れつ…！」

「出でけ！」この台詞は俺のでもなくキンジのでもなくアリアのだった。

「なんで俺たちが出ていかなくちやならない…ここはお前の部屋か

「分からず屋になおしおきよー。しげみへ戻つてくるなー」 面倒くさいから俺は抵抗せずに出て行こうと行った

俺が何をしていつなったんだよ。これも全てこの眼のせいだ。この

呪われている眼の……

## ヤントレ来る（前書き）

今回は速攻で作ったので少ないです。

変な点があれば教えて下さる（――）m

## ヤンデレ来る

### 第5弾 ヤンデレ来る

コンビニで時間を潰したあと俺はジャンプをキンジは「ハシクを買つて部屋に戻つた。

「キンジ、慎重にはいるぞ。何かヤバい気配がする」本気でヤバい気がしたからキンジに言った

「ああわかった。」キンジが返事をして俺たちは犯罪者の根城に侵入するときと同じく、緊張して入つた。

「キンジ、気を付けろアリアがいないもしかしたら襲われるぞ。」体に今までにないほど緊張を走らせた。

「なに、ゲン、アリアは帰つたんじゃないのか？」

「こや、ここに気配があるから間違いない。俺とキンジとアリアだ。」

「ビーハーなんだ?」キンジも緊張していく

「ちよつと風呂ぼりだ…………つてまさか風呂にこなつてゐるのか?」

キンジの方を見ると風呂場の方にいた。

「ゲン、ア、アリアが風呂にこながるぞ」やつぱりか

そこでベン、ローン、チャイムが鳴つた。この押方はまさかな、何

てタイミングできやがるー

「キンジ、俺が対処しどこでやるーそつつけは任せたぞー」ハハハハ  
て俺はドアを開けた

「あ、キンちゃん? なんだゲン君か…ゲン君、キンちゃんは?」な  
んだってなんだよ。ひでーな

「キンジは今デート中だ。用件は?」からかいつもりで言つてみた。

「ゲン君、キンちゃんはどういふの?」

「ドス黒いオーラを出して言つてきやがつた。」、怖えええええ

「キンジが白雪様を見捨てるわけないじゃないですか。キンジは今  
風呂に入っています。からかっただけです。すいません。どうか殺  
さないでください」

「わひ冗談きつこよ。人殺しちゃうといひだつたぢゃないの。じや  
あお風呂から上がつてきたらこれ渡しておいてね

ひ、人を殺すつて相変わらぬうじい怖いなあ

「はいわかりました。渡しておきます。」ここで水の音が聞こえた。

(キンジ、もう少し風呂場にいてくれそして白雪、早く帰つてくれ)

「水の音聞こえてきたしキンちゃんに会つてこいつかな」もう勘弁  
してくれ

「いや、キンジは上がったらい全裸で出でてくるからやめてやつてくれ、  
じゃあまたな」

「ぜ、全裸。じゃあ帰るね」そう言ひてやつと帰ってくれた。

最悪の事態だけは避けれたな。よし、次は……そこでキンジが全裸のアリアに飛び膝けりをくらつて飛んできた。

「あ、俺死んだな」そう呟いた瞬間俺は頭に飛び膝けりをくらつて意識がとおのいた。

神様せつかく白雪を追い返せたのにこれはねえよ。

ヤシトヘ来る（後書き）

早くハイジャックまでこきたいなあ

深追いは危険（前書き）

もうサブタイ何て思い付かないよ 誰か助けてええええええええ

## 深追いは危険

第5弾 深追いは危険

目が覚めるともう朝だった。

「あれ？俺なんでこんなところで寝てんだ？たしか昨日白雪を追い返してから…あ、記憶がないだと」

白雪を追い返してからの記憶が失っていた。

「あら、ゲンも起きたの。ちゅうびにわキンジに朝御飯を出しつつていつてちょうどい」

「なあキンジ今何時だ？つていつか昨日白雪を追い返してからの記憶がないんだけど俺つて何かしたか？」

アリアを無視して聞いた。

「アリアに蹴られて氣絶してたぞ。後今7時半だ。」なんだとアリアに蹴られて氣絶してたのか、って

「なんで俺蹴られてたんだよ…？」アリアをにらみながら言った。

「あんたが見たからよつ！」鬼の形相でにらみ返してきた。「怖いなー、俺ってなにか見たのか？」

「あ、俺もう学校いくわ。じゃあな」俺はそう言って逃げるよつて

玄関からでた。

「待ちなさい逃げるなっ」そつこいつ言葉だけ聞こえたが、無視して行つた。

だが目的地は学校ではなく情報科女子寮のランクであるとある引きこもりの部屋に向かつた。

「はあはあ、くそつ、こんなに遠かつたつて情報科女子寮つて」息切れしながら情報科女子寮の前に来た。

そして引きこもりの部屋に向かつた。

え、どうじて学校に行かなくてランクだつて？そんなの俺が聞きたいよ。

「香織～どうせこらだら～、出でい～」ドアをノックしていった  
「開いてるからわざとへつてこい。準備はしといてやつた」中から声がした

「じゃあ入るわ、お邪魔しますつと。準備済ませてくれたのか、ありがとな。後で面白いで写真見せてやるよ。」

中に入ると茶髪をしたポニー テールのまあまあ可愛い子紅崎香織アカザキカオリが色々な機械の前にいた。

「別にそんなの見せなくてもいい。それだと用事済ませてどうか行け。」

「ああ、じゃあ使わせてもらひます。」

俺がここに来たのはアリアが時間がないっていつてた理由を調べるためにだ。

色々なことを調べるとアリアの母、神崎かなえさんが不当逮捕されたのを知った。誰がそんなことしたのかも調べてみた。するとイ・ウーという単語にたどり着いた。

「香織、イ・ウーって何かわかるか?」疑問に思った俺は香織に聞いてみた。

「イ・ウー? なにそれ何かの犯罪組織かなにか? ちょっと調べてみるわ」

そう言つて香織がノートパソコンを取り出して調べ始めた。

「ゲン、イ・ウーには関わらない方がいいわ。これは危険すぎる。たとえ複写眼アルファ・スティグマを使っても勝てないかもしれない化け物がたくさんいるわ」

珍しく真面目な声で香織が言つてきた。

「なんだよ。イ・ウーってなんなんだ? 複写眼使っても勝てないかもかなりヤバい組織なのかよ」

「ええ、かなりヤバいわ。イ・ウーって化け物生産場みたいなものよ」マジかよ

「わかった。出さるだけ関わらなによろするよ。調べたいのは調

べたから正抛隱滅して学校行くよ

「ゲンはたまにミスするから私が隠滅しとくからわざと学校に行つてきなさいもう一時間田辺りよ」

「ありがとな」俺はそいつから香織の部屋を出た。

(イ・ウー、か……後で自由で調べるか)

そう考えながら学校へ向かつて歩いた。

深追いは危険（後書き）

一応オリキャラのプロフィール書いときます。

紅崎香織

情報科  
インフォルマ

備考

一応ポーテールの美少女で、調べようと思つたら何でも調べられる実力を持つ。

ゲンとは幼馴染み。学校に行かなくてランクをとっている。

たぶん今回の一一杯あると慰みの、おかしこじいりがあれば教えて  
ください (—) 三

勝てない戦闘はすぐ疲れる（前書き）

緋弾のアリア 最新刊1~2円の終盤に出でつてクラスメイト言つてた  
けどそれってホントなの……

嘘だつたらあこつをせじせじ……

## 勝てない戦闘はすぐ疲れれる

### 第6弾 勝てない戦闘はすぐ疲れれる

走つて学校に向かっている途中もうこれ遅刻してるんだし別にのんびり行つてもよくねとこつことこづいて歩きだした。

「ねえそこの君、君つて海山玄武君だよね」歩きだしてすぐに西歐風な服を着た人に声をかけられた。

「やつですけどあなたは誰ですか？用があるなら早く済ませてくれることで」「そこ学校に行くんで」

「僕は教授（プロフェッショナル）と名乗つておひ。僕の用事は君にイ・ウーに来てもらうことだよ」

「なー？イ・ウーだとー？お前イ・ウーの一員か。なぜ俺にイ・ウーに来てほしいんだ？お前もしかしてホモか？」

「ホモ？よくわからないけど僕は君のその眼に興味があるんだ。その呪われた眼複写眼（アルファ・ステイグマ）にね。」

「なるほど複写眼狙いか。イ・ウーはこれを使っても勝てない化け物がいるとか言つてたな」

「誰に聞いたか知らないけどその通りだよ。君は僕には勝てない。だから抵抗せずに来てくれたなら嬉しいのだけど」

「断る。犯罪者になつたりしたら武僧三倍刑で死ぬからな」俺はそう言つてから複写眼を発動した。

「それが複写眼かい？噂どおりの朱色だね。」教授がそう言つと教授から殺氣を感じた。

（あ、これマジで俺一人じゃ勝てないな。逃げることできないかな）そう思いながらトカレフを二丁抜いた。

「これだけの殺氣を向けられて動けるのは流石だね。やっぱり君にはイ・ウーに来てもううよ。」

その瞬間俺はトカレフを二丁同時に撃つた。するといつの間にか持っていた剣で銃弾が切られた。

「マジかよ銃弾切るってスゲーな。こりやマジでヤバイ！」そう言うといきなりライフルの弾が飛んできた。それをとっさに避けてトカレフをしまつて月光、朱雀、陽炎を抜いて二刀一刃をして切りかかった。

「君だつてライフルの弾を避けたじゃないか」教授はそう言つて剣で複写眼でできる能力で強化している月光と朱雀を受け止めて弾いてきた。

「なつ！強化してゐるになんで弾けるんだよ普通だつたらその剣ごと切り裂いてるはずだぞ！」

刀と剣が打ち合いながら俺が言つた。

「使つてる人の腕がよければ剣はいくらでも強くなるからね

「自分のことを腕がいいつてよっぽど自信家だな！」まあ実際に弾いてるからさう言つのはわかるけど

「勝てないし今から能力ばっかり使わせてもらひつ、そつまつて後退してから刀をしまつて炎と雷を放つた。

「そう来るのは推理できただよ。」そう言つて避けて水を放つてやがつた。

「お前も使つかよ。ヤバいこれ勝てない」水の構成を読み取り無効化した。そして今度は風で鎌鼬を全体に放つた

「水が消えたのは複写眼の能力かな？ そろそろ諦めてイ・ウーに来てくれないかな？」そう言いながら剣で鎌鼬を切り裂きやがつた。

「もう四分たつたし長期戦になると勝てないから逃げさせてもらひつよ」

そう言つて俺は投げナイフを適当な方向に投げて、風で軌道を操つて教授に全方向からの攻撃を浴びせた。だがすべて剣で弾かれた。その時にも全くといつていいほどスキがなかつた。

「逃がすわけにはいかないよ。君はイ・ウーにつれていく

くそつ、こんなところでゲームオーバーなんてなりたくないねえぞ。どうすればやつから逃げれる！？

「万策つきたようだね。悪いけど今度はこれから行くよ」

最悪のタイミングで教授の方から攻めてきた。刀をしまつてから選択肢は回避しか残ってない。

「や、やべえマジで！」  
強すざる。「回避が遅れて剣に片腕を深く切られた。

「ほり、もうイ・ウーに来た方がいいんじゃないかな？今ならその傷も直してあげるよ

「断る。犯罪者になる訳にはいかねえ」その時いつの間にか背後にいた教授が剣を降り下ろしていた。

「くわッ…………」諦めて眼を閉じた時に急に眼が熱くなつて意識が途切れだ。

しばらくして……

「……はどこだ？死んだのか？たしかさつきまで教授と名乗る男と戦つてやられかけて急に眼が熱くなつて……」

「まさか勝手に複写眼が勝手になにかを発動したのか！？」ととりあえず起き上がりつとした。

「よし、まだ筋肉痛で動かねえ何てことはないな

「早いところの真っ暗な部屋から出ないとな」ドアがないか手探りで調べた。

「あ、ドアノブがあつたぞ」開けてみると田の前に見覚えのある色々な機械があった。

「あれ？ここって香織の……もしかして複<sup>テレポート</sup>眼が勝手に使つたのって瞬間移動か！」

「な、なんでゲンがこんなとこにいるのよ！？」横から声がしたから見てみると風呂上がりから裸の香織がいた。

## 勝てない戦闘はすぐ疲れる（後書き）

はい教授に出くわしました。もちろんイ・ウーに誘いに…ってか瞬間移動使えるなら早く使えよ！っていう人もいると思いますが、戦闘シーンを自分がどれだけ書けるか知りたいと思ったので書いてみました。もう自分でも意味がわからなくなってしまいました。

おかしいところがあれば教えてください m(\_ \_)m

## 裸の価値がわからない（前書き）

もつ自分でも何を書いているのかわからなくなってしまった

## 裸の価値がわからない

### 第7弾 裸の価値がわからない

「えーと、襲われて戦つてやられて勝手に複写眼アルファ・スティングマレポートが瞬間移動を使ってここに来ちゃったかな？」

子供の頃お風呂とか一緒に入ったことがあるから別に気にせずに言つた。

「あなた、人の裸見といで謝りもしないの？」恐ろしい声で言つてきた。

「お前の裸なんて子供の頃に見たことあるんだし、別に気にしない。でも一応謝つとくゴメン」

「！」子供の頃つてずいぶんと昔じゃない！今私たちは高校生よ！成長してるの！わかる…？」

着替えた香織がイライラした声で言つてきました。

「別に大事なことは見てないから大丈夫だ。そんなことより今何時だ？」

香織が風呂に入つてたといつとはそれほど時間であります

「そんなことよりつてなに？人の裸見といで平然としながら言つて言詞？ちょっと一回死んでよ」

一回死んでよってずいぶんと怒ってるなあ

「ナヒニヤ、セツキの戦闘で片腕を深く切られたんだよ。今はヒツカの止血として凍らせてるけど溶けるだらうから救急箱用意してくれ。」

「話をそりやないでくれる? ゲン、あなた怒られてるつて解つてるの?」

まだこの話続くの? もう面倒くさいよ

それから十分が経つて俺が感謝料20万払った後、自分の記憶を消すといふので話がまとまった。

「で、襲われたって誰に襲われたのよ? この傷から見ると剣の達人かなにかかしら?」

まだ血が凍っているが、包帯を巻きながら香織が言つてきた。

「化け物に襲われたんだよ。イ・ウーの一員のたしか...教授とかいうヤツにやられた。」

「イ・ウーって今朝調べて、複写眼使つても勝てないやつがたくさんいるって言つたじゃないの?」

「あっちから戦闘しに来たんだ。イ・ウーに来てほしいんだよとか言つていきなり殺氣を向けられたり」

「複写眼が勝手に能力使つてくれたおかげで死なずに済んでよかつたわね。もう8時だから帰つて記憶消しなさい」

「複眼使いは今日と明日たぶん複眼使えないから明後日消すよ。じゃあ帰るよ」

「ちやんと消しなさいよ。」セツイられてから俺は香織の部屋から出た。

「セツと部屋に戻つて筋肉痛になつてもこいつ状態にしこなこと俺は走つて部屋に向かつた。しばらくして部屋の前に着いた。ドアを開けると……

「ゲン！ あんた先に行つてるとか言つて学校休んだわねー。どうじうじうとか説明しなさい！」

アリアがこちらを見てから言つた。傷がばれると面倒だからさつとてを隠した。

(アリアの)と調べたとかいつと風穴を開けられるよな……)

「ひ、秘密の特訓をしてたんだよ。そんなことより明日筋肉痛になつて動けないと思つから学校休む。後明日は一回もさわるな」

適当に言ご訳を言つて、言ひ飛ばしとを言つた。

「そんなにきつい特訓をして来たのね。それなりキンジと猫探しじゃなくてあなたを見てた方がよかつたわ。」

「風呂入つてからすぐに寝るからソファーからビコムサよ。」

「お風呂には今キンジが入ってるわ。特訓つて何をしたか教えなさい！」

「秘密つて言つただろうが。教えない『まあ、教えられないんだけど……』

「いいから教えなさい。」これは命令よ。」ベストタイミングでキンジが上がってきた。

「ゲン、お前今日どこに行つてたんだよ。一人でアリアの相手することになつたんだぞ。」

「ゴメン、特訓をしてたんだよ」そう言つてから風呂に行つた。

風呂から上がるときンジに本当は何してたんだよと聞かれたが特訓だよと言つてからソファーで寝た

次の日

眼が覚めたが案の定全身が動けなかつた。アリアもキンジもいないところから見ると一人とも学校に行つたのだろう。寝てこの日を過ごした。

## 裸の価値がわからない（後書き）

ここまで来たのはいいけど、なんかもうおかしいですね。

せめてバスジャックは変にならなによつてこします。

なにかに熱中していると時間が流れるのは早い（前書き）

あれ？本編に触れてないぞ？一体僕は何をしてるんだ奴？

なにかに熱中していると時間が流れるのは早い

第8弾 なにかに熱中していると時間が流れるのは早い

そのまた次の日の朝

「ゲン起きる。朝だぞ」キンジが言つて来た。

「まだ7時だぞ。もう少し寝かせ」

「昨日あれだけ寝てたんだからいいだろ。そんなことよつアリアに戻つてもらえたぞ！」

「え？マジがあいつ戻つたのか。やつたな。一体ビツやつたんだ？」

「俺とゲンが一回だけ強襲科アサルトに戻つて一件だけ事件をやればいいらしい」

「おじキンジ、今なんて言つた？俺が強襲科に戻るだと…………しかも一件だけ事件をするだと…………？」

「よしナイスだ！それくらいでいなくなるんだつたらお安い」用だ！で、その一件って何だ？」

「ゲンいいのか？強襲科に戻るの。いやがると思つたのに……あと、まだ一件は決めてないらしい」

「別に嫌いやなこいつのは嘘になるナビアリアがいなくなるんだつたら話は別だ。いつからだ？」

「今日からだ。あと昨日アリアのことを理子に調べてもひりてわかつたけどあいつ貴族だつたらじい」

「そんなこと前から知つてゐる。俺も大体は調べた。そんなことよつ朝飯食わねえか昨日なにも食つてないから腹へつてんだよ。」

「朝飯何てないぞ」…………え？ マジかこれ教授プロフュッショソと戦つたときよつやバイぞ

「おこおこおいおこおこおこおこおこおこよつと待て昨日なに食つたんだよ残り物ぐらこあるだろ。」

「いや、全くない」神様ああああ、俺に食い物をくれええええ

「あ、忘れてたしたのコンビニで買えばいいじゃないか。キンジコンビニ行つてくる」

そう言つてコンビニに行つてから弁当をうち買つてから呑つてきた

「よし、朝飯を食つが」

「いやお前それ全部食つのか？ 食こ過ぎだら。体に悪いぞ」

「大丈夫だ問題ないこれぐらこ五分で食える」まあ実際そんなにわからないが

「食えすぎだら。やうこや一昨日なにやつてたんだ？ 特訓なんてし

てないだろ」

「調べー」としてた。」調べーとしてたのは事実だったから言った

「眼を五分も使ってか？」

「その後特訓してたんだよ」

「まあ別にいいが」別にいいんだつたら聞くなよ

そう思つていらうりにも弁当が残りひとつになつた

「キンジそらそろバスの時間だな。よしそくか」弁当を食つ尽くして言つた。

学校でアリアにキンジから言われたことを言われた。一般科目も終わつて専門科目の時間になつた。

俺はキンジと共に強襲科の専門棟にむかつた。

専門棟に入ると死ね死ね団のやつらに絡まれたあとやつと訓練ができるようになつた。

「キンジ、俺はもう死ね死ね団と話すだけで疲れたんだが……もう帰つていいか?」

「ダメだろ帰つてアリアの怒りを買つてまた部屋に来たらどうすんだよ」

「ああそつか」軽く準備運動をしながら答えた。

「俺は射撃でもせつておへかうまたあとでな」そつと口づけられ俺は  
キンジと別れた。

『氣づいたら一つの間にから時になつていた

「キンジにおいていかれてしまつてゐし！」そして帰つた。

なにかに熱中していると時間が流れるのは早い（後書き）

後半適当ですが許してください。早く進めたかったんです

コア充はみんな爆発しよう（前輪轍）

「うーん、こまごかつまくできなー

## リア充はみんな爆発しよう

第9弾 リア充はみんな爆発しよう

「キンジ、帰るなら帰るって言つてくれよ。気づいたら俺一人だつたから悲しかつたじゃないか」

「ゲンが射撃に熱中してたんだろ」

「だからつて置いてかないでくれよ。で、何してたんだ？」

「ゲーセンで遊ぼうとしたらアリアがついてきた。」つてことは「一トしたつてことか……」

「リア充は爆発しろ！」自分の正直な思いが言葉に出でてしまった。

「リア充なんかじゃねえよ！アリアに邪魔されたところのビニガリア充なんだよ！」

これだからリア充は自覚もなしにフラグを建てるから困るよ。

「俺の頭の中じゃ、デートする=リア充 なんだよーだからキンジ俺のために爆発してくれ。死体処理はしどいてやる白雪にばれずには」

「なんだその方程式はー？しかもデートじゃないー」キンジが本気で抗議してきた。

「やうじゅやつほじ怪しいんだよ。なんだそのケータイストラップは？アリアからのプレゼントか？」

俺がそう言つとキンジが少し黙つた。あれ？もしかして本当にプレゼントか？

「キンジ、とりあえず手榴弾持つてくるよ。心の準備をしどこでよ。今日が最後の日だ」

「ちょっと待て！別にプレゼントなんかじゃないんだ！これは俺がアリアのためにやつたときに2つ落ちたから1つあげるって言われて……」

「キンジ、人はそれをプレゼントと言つのだよ。諦めて爆発しようつほら手榴弾なかつたから代わりにこの武偵弾使っていいから」

そつ言つて俺は炸裂弾グレンネードをキンジに差し出した。

「いやいや、もう面倒だつたけどはじめから話すよ」そうして10分間キンジの話を聞いた。

「言いたいことはそれだけか？」

「ああこれだけだ。」キンジがこれで助かる的な顔をしていた。

「キンジ、その話をして助かると思つてたのか？人はそれをデートとよんでいるんだ」

「どうやつたらわかるるー？」

「ゲーセン一緒に行つてクレーンゲームしてとれたのを分けた。あとそれを一人で一緒にケータイにつけるところだ。」

「」で俺のケータイに着信が来た。チラ運のいいやつだぜ見ると番組からだった

「なんだ? なにかようか?」俺がキンジとの話を切り上げて浴室に行つてから応答した。

「ゲン、記憶ちやんと消したんでしょ? まだ感謝料振り込まれてないんだけど?」

あ、すっかり忘れてたなあ。もう消したつてことじとくか

「何の記憶を消すんだ? 慶謝料つて何か悪いことでもしたか?」

「その様子だと消したみたいね。とりあえず二〇万よこしなさい」

「よくわからないが悪こ」としたんだな……明日でも渡すよ、我ながらいい演技だ。

「わかったわ、明日ひやんと持つてきなさいよ」そうこうてきてから電話を切られた。

(まだ覚えてたのかよみ支出がす)こな。 )

もつキンジをこじるほど体力ないからもつ風呂入つて寝よう

「キンジもつ風呂は行つて寝るわ」アクビをしながら風呂に入つて

「ああ、わかった」キンジは助かつたといふ顔をしていた

そして寝た。次の日にあんなことが起きるのも知らず……

リア充はみんな爆発しよう（後書き）

やつと次にバスジャック

理子のチート技とか考えてくればありがとうございます。

バスに乗り遅れると事件が待っている（前書き）

結構少な目です

## バスに乗り遅れると事件が待つている

第10弾 バスに乗り遅れると事件が待つている

朝起きるとまだキンジは寝ていた。だから一度寝した。

「ゲン起きて朝だぞ」キンジが起こしに来た。

「ああ、わかった。今日は雨か……今日は学校休むわ。お休み  
ボケてないで起きる。まだ少し時間あるが着替えたりしなきゃダメだろ」キンジが言つてくる

「お前は俺のお母さんかよ。わかつたよ起きればいいんだろ」俺は  
起きてから着替え始めた

「キンジ、今何時だ?」

「今は7時50分だ。そろそろ行かないと、雨降つてのんに乗れなくなるぞ」

「じゃあ行くか」準備をした俺が言つた。

「キンジ、なんで7時58分に来るバスがもう来てこんなにも人がいるんだ?」

「わからないが急ぐぞ」俺とキンジは走った

「やつたー乗れたーおつキンジとゲンおはよーー。」嫌みな顔で武藤が言つてきた。

「武藤、乗せろーチヤリ爆破されてないからこれ乗れなかつたら遅刻しちまつー。」キンジが言つた

「無理だーキンジ、男は思ひきりが大事だぜ?一時間田フケぢやえよーとこつわけで二時間田にまた会おつ」

「武藤、学校に着いたら絶対にお前を二枚下ろしてやるー。俺が言つたがバスは扉を閉めて出発した。

「キンジ、どうすむ? 今日はやつぱり休むか?」

「いや学校には行へよ」

「じやあ歩こてこへか。面倒くせこナビ……」そして俺たちは歩きた始めた。

強襲科<sup>アサルト</sup>の黒い体育館を横切つたすると、キンジのケータイが鳴つた。

「強襲科のそばだ」「ゲンなりとなつてこゐるわ」「なんだよ。強襲科の授業は五時間田からだわ」

とかキンジが言つたあとにキンジがケータイをしました。

「ゲン、こますぐ装備に武装して女子寮の屋上に行くぞー事件だー！」

「キンジそれってアリアから？」俺が言った

「ああ、そうだ。約束した一件の事件だ」「装備って結構きつい事件だな

俺たちはこの装備に着替えた

「キンジ、この装備結構動きづらこんだが。制服じゃあダメなのか？」俺が聞いた

「アリアが絶対に許さないと思つからこの装備でいてくれ」はあ、これ動きづらすぎるだろ

「女子寮の屋上に行くんだったつけ？早くいこよ」俺が自分の姿を苦々しく見てくるキンジに言った。

「ああ、行くか」そうして俺たちは女子寮の屋上に向かった。

バスに乗り遅れると事件が待っている（後書き）

次回やつとバスジャックできるだけ早く投稿します。

理子のチート技募集中。このままでは理子が丸坊主になつて、切り  
刻まれてしまつ

## 友達を見捨てると神に見捨てられる

第11弾 友達を見捨てると神に見捨てられる

屋上に到着すると、C装備をしているアリアがいた。そして、階段の方には、レキがいた。

「おいアリア、無線機なんて使ってなにしてんだよ。」俺がアリアに聞いた。

「今、他のランク武僧と連絡とりながらしてるので」イライラした声で言つてきた。

「その様子からすると、一人もいられないのか？」

「みんな他の事件で出払つてゐるみたい。だからもう時間切れね。」

「4人パーティーで追跡するわよ。火力不足は私が補う」

「追跡つてなんなんだ？何が起きたのか状況説明ぐらいしてくれ」  
ブリーフィング

俺がアリアに言った。

「バスジャックよ」「——バス？」アリアが言つたのにキンジが反応した。

「武僧高の通学バスよ。あんたたちのマンションの前に今7時58分に停留したハズのやつ」

(ハツハツハ、武藤め、ざまーみやがれ友達を見捨てたから神に見捨てられるんだよ。)

「犯人は車内にいるのか?」キンジが聞いた

「たぶんいないでしょうね。バスには爆弾が仕掛けられてるわ」

「最初の武偵はバイク、次がカー、そしてその次があなたたちのチヤリ、今回がバス……ヤツは毎回『減速すると爆発する爆弾』を仕掛けで自由を奪い、遠隔操作でコントロールするの。でも、その操作を使う電波にパターンがあつてね。あんたたちを助けたのも電波をキャッチしたのよ。」

「でも『武偵殺し』は逮捕されたはずだぞ」キンジが言つた

「それは真犯人じゃないわ」まあ今こんなことになつてるしそうだろうな

「お前何の話をしてるんだ——」

「そろそろ行かないか?武藤の焦つた顔を早くみたいんだが……」  
俺が話を中断させて言つた。

「これが約束の最初の事件になるわね。二人とも実力を見せなさい。  
楽しみにしてるんだから」

まあ、キンジはヒステリアモードになつてないし、俺も複写眼を使  
う気なんて全くないがな

そしてヘリに乗つてバスの上まで来た。

「行くわよ。手抜いたりしたら風穴開けるわよ」「みるわよ

そう言って強襲用パラシュートを使いながらバスに乗った。キンジは落ちそうになつたがアリアがつかんでくれてた。俺はすぐに中に入つて武藤の顔を拝みに行つた。

「ゲン！」武藤が言つてきた。

「ああ。ちくしょう。なんで俺はこんなバスに乘つちまつたんだ？」

「武藤、友達を見捨てるか？」「なるんだよ」

「あれだゲン。あの子」武藤が指を指していたのはいかにも弱そうな女の子だった。

「海山先輩！助けてっ」「中等部の後輩のようだ

「何があつたんだ？」

「いつの間にか私の携帯がすり替わつてたんですよ。それが喋りだし

「速度を落とすと 爆発しやがります」これは『武偵殺し』だな

「ゲン、状況を報告しなさい」アリアの声が聞こえてきた。

「お前の言つ通り『武偵殺し』の仕業だった。やはり遠隔操作のようだ。そつちは？」

「爆弾っぽいものがあつたわ！」

「それを解体してくれ」

「わかつたわ解体を試み——あつ！」アリアの叫びと同時に振動がバスを襲つた。

そとを見てみると、5台のオープンカーの座席からじり工を載せた銃座がこちらを向いていた。

「みんな伏せろ！」俺以外の生徒が頭を低くした直後無数の銃弾がこちらに飛んで来た。それをとっさに月光を取りだし自分の頭に当たりそうなものだけ弾いた。体は守つてないから銃弾が当たつて、痛かった。

その後バスが妙な揺れかたをした。運転席を見てみると運転手が倒れていた。

「武藤！運転代われ！」痛みに構わず俺が言った。

「オレ、あと一点しか違反できないんだぞ！」

「気にするな。全責任は俺がとつてやる…………多分」そう言って武藤にヘルメットを渡した。

「キンジ、アリア、大丈夫か！」

「俺は銃弾に当たつたがヘルメットを壊された。」

「アリアはどうだ！」「

「ヘルメットを壊された。」 なんでヘルメットばっかりなくなるんだよ。

「俺は右のオープンカー破壊するから、アリアは爆弾を解体してくれ、キンジは左を頼む」

俺がそう言つて右のオープンカー三つをトカレフで破壊したその直後

「アリアアつ！」 「アリアーーアリアああつ！」 という声がした後レキが左側のを破壊して爆弾を外した音が聞こえた。 しばらくしてバスが止まつた。

そして俺たちの最初の事件が終わつた。

## 尾行つて案外難しい（前書き）

うーん。即興で考えるのって難しいよね。他の作家さんは凄いなあ

## 尾行つて案外難しい

### 第12弾 尾行つて案外難しい

事件の後、アリアは武偵病院に入院したが、傷は幸い浅かったようだ。

翌日、香織に金を払った後、個人的にバスジャックを調べてから、一人でアリアの病室に行くと、先にキンジが来ていたようだ。だから、空気を読める俺は先にトイレに行つた。戻つてくるとキンジがさえない顔をして出てきた。

「キンジ、どんな話したんだ?」あえて空気を読まず俺は聞いた。

「別に」そう言つてからどつかに行つた。俺はアリアの病室に入つた。

「おーい、アリア元気か?」元気なわけないが言つてみた。

「次から次にわいてくるわね」アリアが失礼なことを言つてきた。

「俺は『ゴキブリか何かか!』定番の突つ込みをしておいた。

「まあ話を聞け。『武偵殺し』のことだ」

「キンジから聞いたわ。だからもういいわよ。帰つて

「キンジから?ああ武偵高が調べたやつか。俺は探偵科のSランク  
らしく自力で犯人を推測した。」

「何よ。言つてみなさい。」

「おそれらく犯人は、バスに乗つていなかつた武偵高の生徒だ。」

「やう言ひ根拠は何よ」

「狙われてゐるのは武偵、武偵たちの乗るタイミングを計つてだ。しかもセグウェイをそこに向かわせている。つてことは乗つている乗り物がどこを通るかの時間帯を知つてこる。そんなのは武偵高の生徒ぐらいだ。だから俺は犯人は武偵だと推測してい。まあ無理矢理のよつな氣もするけどこんなもんだ。」

俺が推測したままに言つと、驚いた顔でじらりを見ていた。

「じゃあ誰がやつたのよ? セグウェイ盗んでなんで武偵を殺したのよ」

「ああ、俺にはまだわからねえ。まあまだ調査はするがな

「役たたず」「マジかよ。ここまで言つてあげたのに役たたずつてひど過ぎるだろ。

「そんのもお前はわからなかつたんだぞ。なんで俺が役たたずつて言われなくちやならねえんだよ」

「つぬれこー出でけ!」逆ギレられちまつたよ。

「わかつた。出でつてやるよ。多分わかり次第教えてやる。多分な  
う言つてから俺は出でていった。

結局何もわからないまま、アリアが退院する日曜日の朝が来た。

「キンジ、なんでそんなことやつてんだ?」キンジが掃除をやっていた。

「考え事しないよう『だよ』ああ、なるほどアリアのことを考えたくないのか。

「『武僧殺し』調べるの面倒くさいし俺も手伝うよ」

「ああ、じゃあ頼む」そうして昼まで掃除をやつていた。

昼に気分転換のためにキンジを連れて学園島の片隅に連れていった。

「キンジ、あれってアリアだよな?」アリアっぽい人が美容室から出てきたのを目撃した。

「ああ、そうだな。髪型を誰と会うんだろうな」髪型えたのつて傷を隠すためだよな。

「さあ誰だらうな。そりだキンジ、アリアを尾行しようぜ!」俺がキンジに言つてみた

「ゲンが行くつてなら行く

「じゃあ行くか」そう言つてからアリアの尾行が始まった

「あんな服装してどこに行くんだろ? 」もしかしたら貴族だし許嫁とかかな? キンジの反応をうかがった。

「あんな暗い顔していくものか? 工家とつまへこつてないらしいから多分違つだろ」冷静に言われた。

「まあ尾行してたらわかることだな。」アリアが降りたから俺たちも降りた。

その後、適当な話をしながらアリアを尾行していくと新宿警察署についた。

「へつたな尾行。シッポがにょろにょろ見えてるわよ」アリアが振り返つて言つてきた。

え、マジかよ氣づいていたのかよ。まさかここで風穴を開けられるのかよ。

た、助けてくれええええええ

## 尾行つて案外難しい（後書き）

武器紹介の時に太刀つて書いてましたが、どうやって使うか迷うから、当分は出てこないと思います。

## カップ麺の3分は長いが面会の3分は限りなく短い

### 第13弾 カップ麺の3分は長いが面会の3分は限りなく短い

「お前が前に言つただろ。『質問せず、武偵なら自分で調べなさい』って」キンジがまともな言い訳を言つてくれた。これだと助かるな

「なんだ、気づいていたのか。だったら早く言つてくれればよかつたのに」俺が言つた

「迷つてたのよ。教えるべきか。あんたたちも『武偵殺し』の被害者だから」

「なんだ、『武偵殺し』が関わってるのか。そしてここに来たってことは……謎が解けた。神崎かなえさんとの面会のためにここに来たのか。だったらそんな格好してるのもわかるよ」

「そうよ。ゲンはそんなことまで調べたよつね。どうせ追い払つてもくるんでしょ。だったら行くわよ」

そつとして俺たちは入つていった。

「神崎、面会は3分だ」田付きの悪い管理官が言つた

「まあアリア、どちらが彼氏さん?」

「ちつ、違うわよママ、『イイシ』は遠山キンジと海山武。武偵高の生徒でそんなのじゃないわ。絶対に」

「キンジさん、玄武さん、初めまして。私アリアの母で神崎かなえと申します。娘がお世話になつてゐるようですね。」アリアと違つて礼儀正しく言つてきた。

「あ、いえ」あ、この人キンジが苦手とするタイプだな

「ママ、面会時間が3分しかないから手短に話すわ。このバカ面一人は『武偵殺し』の3、4人目の被害者なの」3分しかないつて本当にどんだけ罪重ねられたんだよ。

「まあ」

「それに一昨日はバスジャック事件が起きてる。『武偵殺し』の活動は活発になつてるわ。もうすぐシッポを出すでしょうし、こっちのバカ面が『武偵殺し』は武偵高の生徒だと推理してたし、だからまずは『武偵殺し』を捕まる。そして、ママをスケープゴートしたイ・ウーのやつらを全員ここにぶちこんでやるわ

イ・ウーか。なるほどアリアとはそんな繋がりがあつたか。ってか全員つて教授プロフェッショナルはかなり難しいだろ

「アリア。気持ちは嬉しいけど、イ・ウーに挑むのはまだ早いわ『パートナー』は見つけたの？」

「それはまだだけど、誰も、あたしには、ついてこれなくて」

「ダメよアリア、そのままじゃあ自分の能力の半分も出せてないのあれで半分以下って

「人生はゆっくり歩みなさい。早く走るのは、転ぶものよ」

「神崎、時間だ」

「待つててママ、必ず公判までに真犯人を全員捕まえるから」

「アリア。私の最高裁は、弁護士先生が、一生懸命引き伸ばしてくれるわ。だから落ち着いてパートナーを探すのよ。その額の傷は一人で対応できない証拠よ」

「やだやだやだー！」時間だ！ 管理官が乱暴に引き剥がした。

「やめろ。ママに乱暴するなー！」その後かなえさんは戻つていつた  
「訴えてやる。あんな扱い、していいわけがない。絶対……訴えてやる」と独り言を言いながら新宿駅に戻つていた。

その時、俺は考えた。教授と戦つて殺されかけたって、言おうかどうかを……結局言わいでおいた。

「アリア……」キンジの声が聞こえた

「泣いてなんかない」アリアは顔を伏せて震えていた。

「おい……アリア」

「な……泣いてなんか……」

「うわあああああああ……ママあああ……ママあああああああああ……」

俺はなにも言えずにアリアのそばに立つていただけだった。



カップ麺の3分は長いが面会の3分は限りなく短い（後書き）

次回からやつとハイジャックに行ける。そして、サブタイはどんなにしようかな

おわりく明日の昼か夜中に投稿します

## 幼馴染みとその戦姉妹は嫌なところが似ている

第14弾 幼馴染みとその戦姉妹は嫌なところが似ている

結局あの後、泣きやんだアリアが「一人にして」と言つてきたから、あそこで別れた。

週明けの一般科目の授業の時、俺の左隣は空席だった。アリアは学校に来なかつた。

探偵科の授業中に寝よつとしている、携帯にメールが来た。香織  
からだつた。

『ゲン、放課後に部屋に来なさい。『武偵殺し』についてわかつた  
ことがあるわ』

といつメールが来た。ああわかつた放課後に行くと返信しといた。

そして放課後、キンジも誘つてみたがキンジは理子に呼ばれたようだ。よかつたあ。俺が理子に呼ばれなくて、俺アイツかなり苦手なんだよな……ってあれ? もしかしてまたキンジはデートに行くんじやないのか? 気づいたときにはもう遅かつた。キンジは逝つてしまつた。え? 漢字間違つてるだつて? いいんだよこれで、こつちの方がキンジには似合つ

そして俺は香織の部屋に行つた。

「おーい、言われた通り来てやつたぞ」

「遅いわね、もう6時よ。今夜7時のチャーター便に『武偵殺し』が乗るかもしね」

なんかいきなり物凄いこと言い出したぞ。チャーター便に『武偵殺し』が乗るのか…って

「おいそれ、もしかしてハイジャックされたとか言つんじゃないだろ?」

「ハイジャックされると思つわ……後、あなたが調べてた神崎・H・アリアもそれに乗つてイギリスに帰るよつよ」

「アリアが?なるほど、俺たちの実力が残念だつたからイギリスでパートナー見つけようつて訳か」

「もし行くなら氣を付けなさい。『武偵殺し』は遠山キンジの兄、遠山金一をやつてしまつてるわ」

「なつ、キンジの兄貴つて強かつたんだろ。つてかあれば爆発で死んだんじゃあ」

「違うのよ。あれは遠山金一を狙つたと思つ。多分遠山金一と『武偵殺し』は直接対決だつたと思う

「ままで、まさか『武偵殺し』がアリアを狙つてるんじゃないだろ?」

「その可能性はあるわ。もしかしたら他の人を狙つてるかもしれないけど」くそつ、今から羽田までだと20分はかかるだろ?」

「教えてくれてありがとう。んじゃ行くわ。」 そう言ってから部屋を出た

「情報料5万円ね」とか聞こえたが今は構つてられない。ってか金取るのかよ！？

つてか俺はどうやって羽田までいけばいいんだよすっかり忘れてたなあ……しまったあああああ

そう考えていた時に、「ゲンセンぱーい、香織さんと言われてきてあげましたよ」 そう言いながら二輪のバイクで来て降りた。

「あれ？ 君つてたしか車輛科で香織の戦姉妹の…………誰だっけ？」  
知つてはあるんだけどなー名前何だっけ？

「酷いつ、私の名前は志村 心ですよ」

「やうだつたそつだつた。そつにえばそんなん名前だつたね。香織に言わたつてことはもしかして羽田まで送つてくれるの？」

「送らないです。このバイク使つて一人でつてください。一応300越せるように改造します」

「そつか、ありがとな」 そうつてからバイクにまたがつて発進した。

「使用料3万円ですか」

「やっぱお前も金取るんかい！」 僕は一応突つ込んだが聞こえて

いないだろ？。

やつぱり戦姉妹同士似てるんだなあ。別にこんなとこが似なくていいのに……

「はあ、今月かなりきつこな」そつ言ひながら高速を時速280?で走った。

幼馴染みとの戦姉妹は嫌なところが似ている（後編）

あれ？まだハイジャックまでいってないぞ？どうなつてんだ？

登場したオリキャラの詳細置いときます

名前：志村 心

学科：車輌科 ジラソク

容姿・黒髪のストレート曰は黒

詳細：香織の戦姉妹で、香織と同じで、であったのか玄武も知らない。弱々しい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1976z/>

---

緋弾のアリア～呪われた眼を持つ者～

2011年12月20日16時49分発行